

老球の細道324号

コーチの愛情、思いやり

会津バスケットボール協会 室井 富仁

日本バスケットボール協会公認コーチ講習会で毎年「コーチの資質」について講義している。話しながら私の資質についても自己チェックする。健康のための「人間ドック」、車の「車検」と同じように、コーチも定期的に資質のメンテナンスをしなければならない。

コーチは聖職である。誰もが気軽に、簡単にできる仕事ではない。選手とその家族たちの大切な時間と人生に関わっている。そんな「コーチ」の仕事にとって必要な資質は何か。アメリカのコーチ協会が実を的を得た語呂合わせでまとめている。ハンガリーの四輪馬車に語源を持つ「COACH」の頭文字で下記のようにシンプルにまとめられている。

*C (Comprehension)・・・総合的知識。

バスケットボールの知識、スポーツ科学、安全に関する知識等。

*O (Outlook)・・・哲学、信念、人生観。

迷ったとき、判断のよりどころとなるもの。ぶれない良識ある決断をするために、優れたコーチは必ずもっている。哲学の追及に終わりはない。答えも簡単に見つからない。

*A (Affection)・・・愛情、思いやり。

バスケットボールと選手を真に愛すること。選手の健康、幸福に関心を持つこと。嫌われても注意できること。

*C (Character)・・・人格、品性。

コーチは選手にとって人生のロールモデル。特に必要なのは、真摯な性格、言動の一致、マイナス感情のコントロール。

*H (Humor)・・・ユーモア。

笑顔、ジョーク、ユーモアで練習を楽しませる。幸運であることを楽しみ、ピンチの時こそジョークで不運に溺れることのないように。

この中で注目されるのが「愛情、思いやり」。えてして、コーチは選手から好かれたい、慕われたい、信頼されたいと思いがちなので、「嫌われても注意する」ことは勇気がいる。最近話題になっているアドラー心理学でも「嫌われる勇気」について論じられている。スポーツ雑誌『Number』の今月号はスポーツ界の「嫌われる勇気」について特集が組まれた。その中でラグビー前日本代表HCエディー・ジョーンズについて一部抜粋した。

【選手たちにハードワークをさせるには、「お前が必要なんだ」というメッセージを送り、コーチが自分を見てくれるていること、自分について考えてくれていること、自分を必要としていることを選手に実感させる。アドラーは「人は、自分には価値があると思えたときにだけ勇気が持てる」と語っている。

嫌われる勇気とは「自分を貫く勇気」。自分を信じて、自分自身であり続ける。多くの日本人は、他者から好かれたいと思うあまり、いつも他人の顔色を窺って生きている。その結果、自分であることを貫けない。選手に嫌われても、まったくかまわない。ただし、選手から敬意を持たれていないとすれば、それはコーチ失格です】

選手はコーチの愛情、思いやりを感じるまでは、コーチの知識、技術に何ら興味を示さない。ちなみに私の愛情表現は、コートに足繁く通い、選手との時間をたくさん作ること。